

参 考 图 表

「広島20-30代調査」報告書 (統計分析篇)

吉備国際大学 轡田竜蔵
(公益財団法人マツダ財団 委託研究)

問題意識

●「地方の若者」に焦点を当てた大規模な総合調査

⇒「大都市圏」に偏りがちな若者調査(学生調査になりがち)とは異なった視点。

●「若者」とは、ライフコース上の「自立」を達成するために、さまざまな選択肢に向き合っている年代。その意識・実態にどのような分化が見られるのか。地域的な背景を意識しながら、考えてみたい。

「地方の若者」についてのこれまでの議論

ポジティブ系

- 地域に開かれるジモト好きの若者⇒地域づくりの人材として期待

ネガティブ系

- 身近な人間関係にひきこもり、活力を欠いた若者⇒社会的支援の対象

ポジティブとネガティブの間

- 「地方暮らし」の理想と現実との間のジレンマ・・・轡田竜蔵
- 「内にこもりつつ外に開かれる」志向性・・・阿部真大

調査地

- 「広島市の若者」調査から、日本の「地方の若者」に関する一般的な議論に応用できることをねらい、「安芸郡府中町」と「三次市」の二か所で調査を実施。

- 府中町・・・東西南北を広島市に囲まれる。郊外型の住宅地が広がり、商業的にも発展。「地方中枢拠点都市」(三大都市圏以外、人口20万以上、昼夜間人口比率1以上の都市)の地域環境の典型。

- 三次市・・・広島都市圏から車で約2時間。中国山地に位置する県北の「中心市」。「地方中枢拠点都市」と雇用圏や平日生活圏が重ならない、地方の「周辺地域」の典型。

広島駅前から府中町方向
(丘陵地の住宅地のあたり)



イオンモール広島府中
(府中町西部)



丘陵地のニュータウン
(府中町東部)



三次市中心市街地



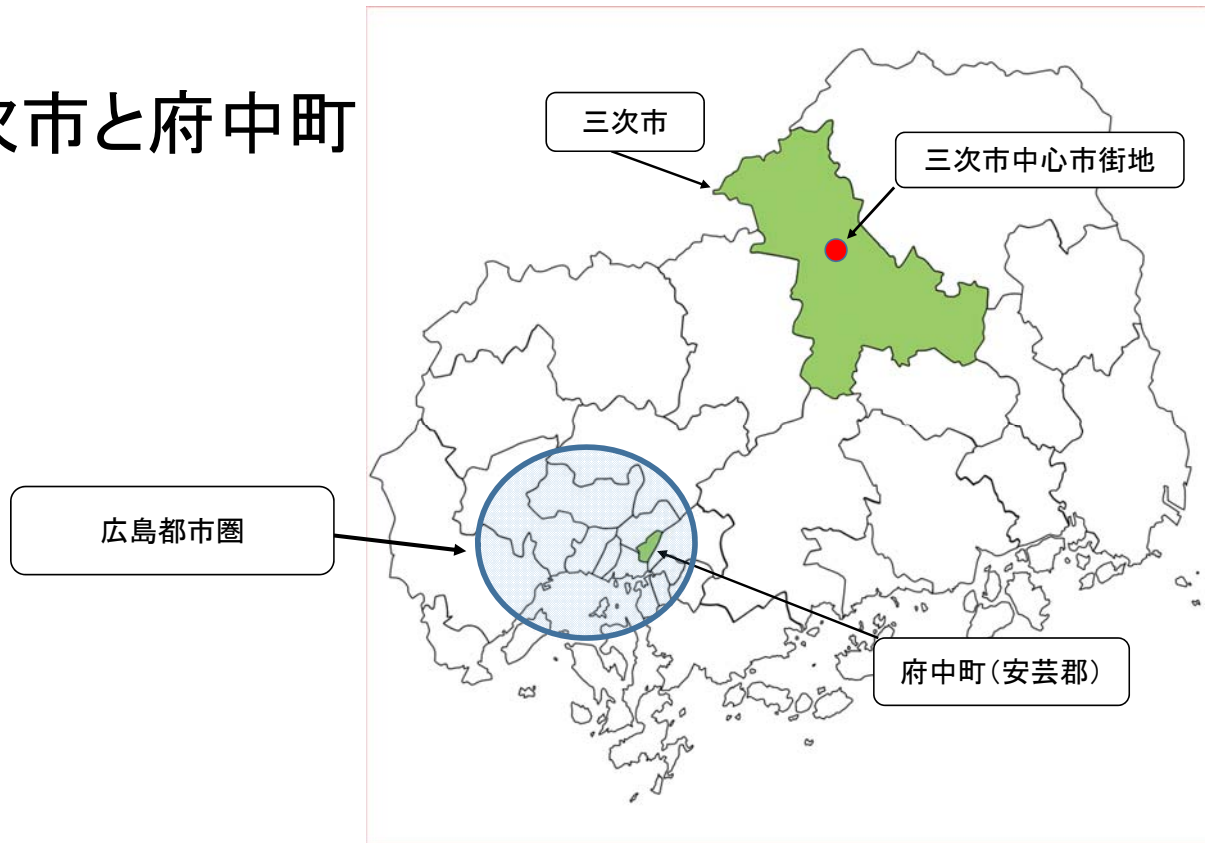
三次市周辺部（三次市の大半は農山村地域）



調査の概要

- 2014年7月 住民基本台帳から無作為抽出された府中町と三次市の20-30代(6月1日時点)に、各1500票を郵送(17票が不達)
- 回収票は計867票、回収率29.1%(府中町404票、三次市463票)
- この他、両自治体で20-30代の住民数十名を対象にしたインタビュー調査を実施

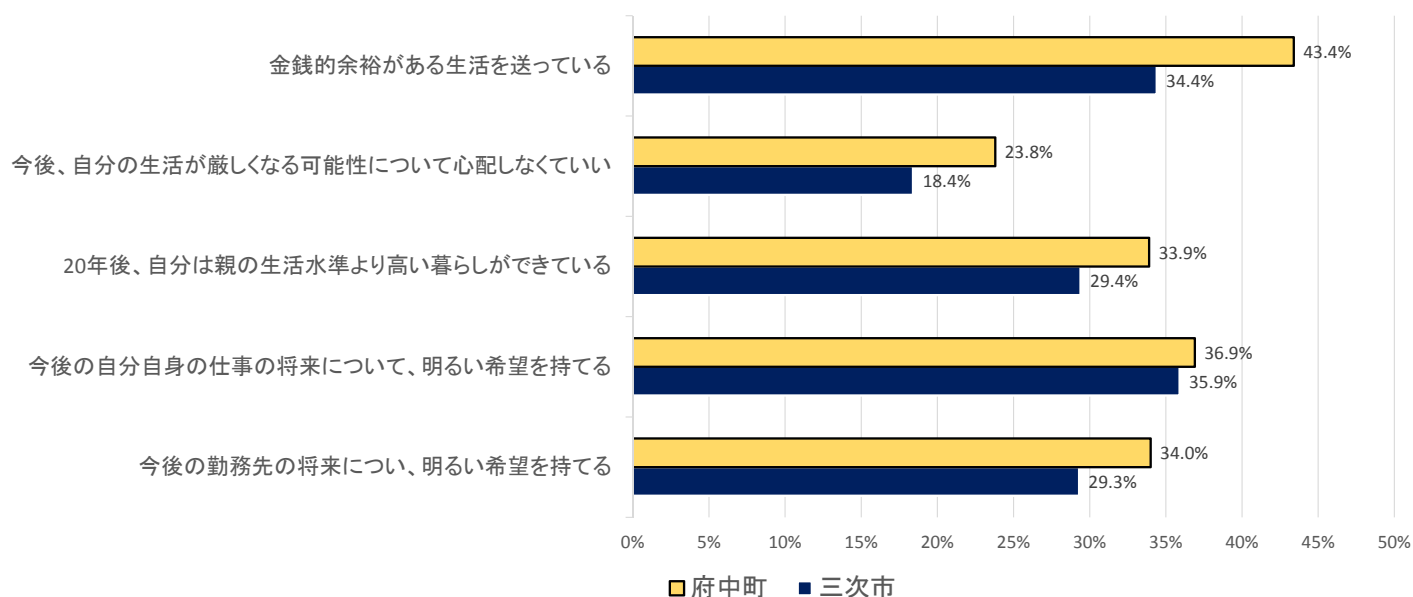
三次市と府中町



地方暮らしは楽ではない

- 経済面での現状評価・将来展望の厳しさ
 - ・「金銭的余裕がない」と考える者が約3分の2。景気のいい職場はまれであり、右肩上がりの将来展望を描いている者は少ない。
- 「地方は大都市より仕事が楽」とは決して言えない
 - ・府中町・三次市ともに、男性の2割以上が週60時間以上働いていて、全国平均と比べても長い。

経済面での現状評価・将来展望は厳しい



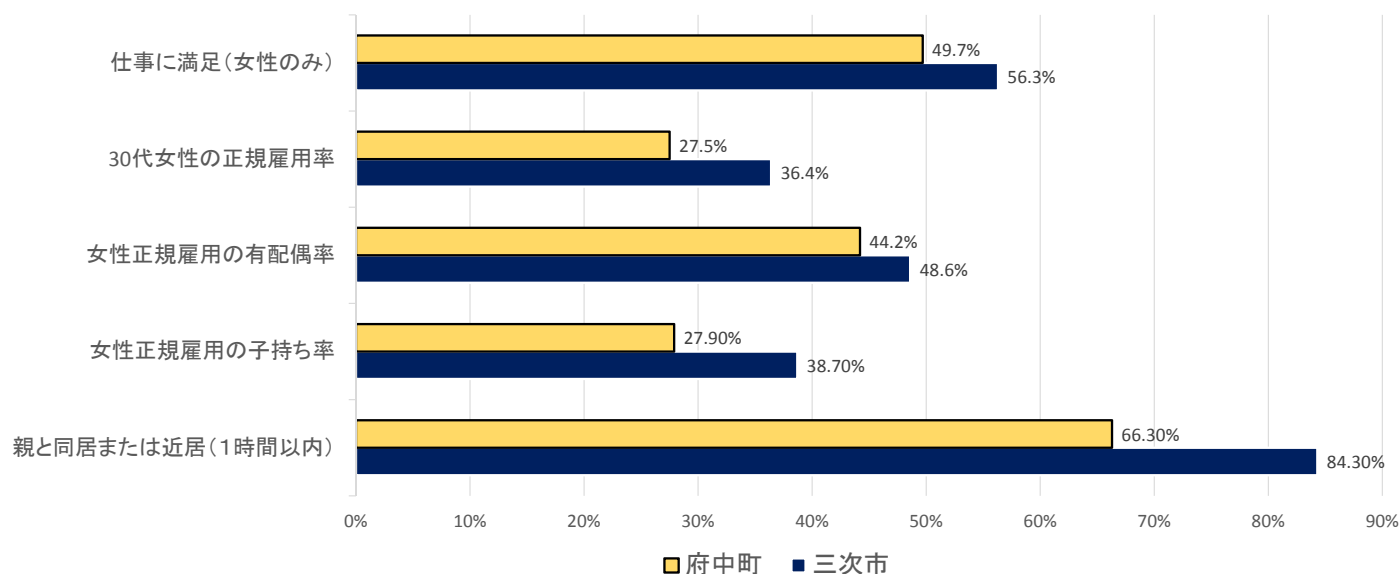
地方暮らしは女性にとってメリットがあるか？

●女性についていうと、三次市のほうが、府中町よりも「仕事満足度」が高い。正社員の有配偶率、子どもがいる者の比率も多い。専業主婦率も少ない。

⇒背景に、三次市では親と同居または近居(1時間以内)しているケースが多く、親に依存しやすいということが考えられる。(裏を返せば、結婚しても親に依存している者が多い)

⇒府中町のような地方都市は、就業と子育てを両立したい女性(特に地元外在住者)にとって大都市よりメリットがあると言えるのか? ~ さらなる検証が必要。

就業継続する女性をめぐる環境 ～三次市のほうにアドバンテージ？



親への依存

●未婚者の「父または母と同居」は府中町69.4%、三次市67.0%。既婚者の「配偶者または自分の親と同居」は府中町5.9%、三次市24.2%。世帯年収は高いが、個人年収は低く、生活満足度や自己肯定感は低い。

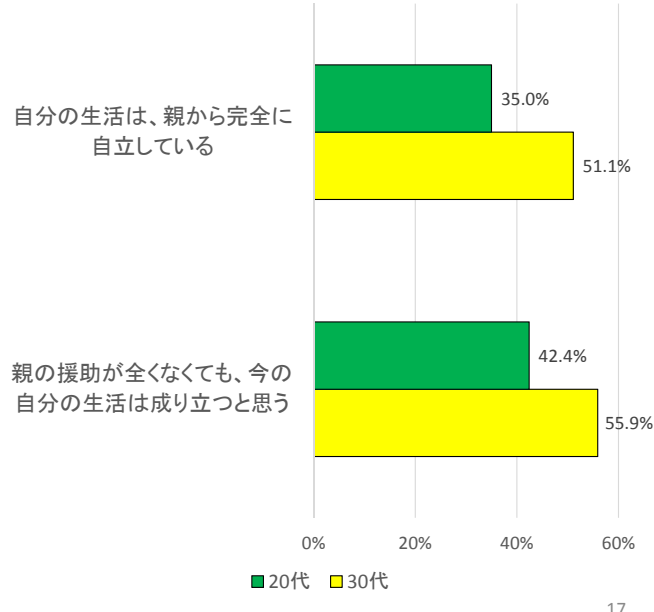
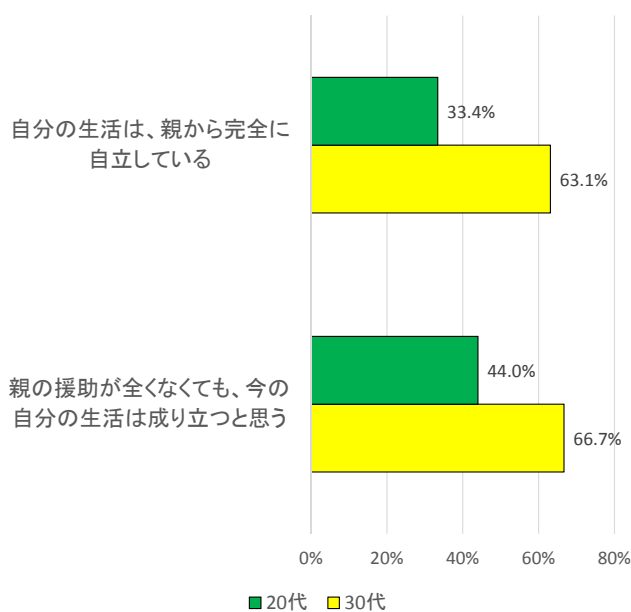
●「父または母と同居」のばあい、結婚していても「親からの援助」を必要とし、そうでなくては「生活が成り立たない」と考えている者が多い。～「パラサイト・シングル」ならぬ「パラサイト・カップル」は少なくない。

●とくに三次市では、約半数が30代になっても、「親から完全に自立していない」と考えている。

親への依存は30代になっても続く

府中町

三次市



地域満足度の意味するもの

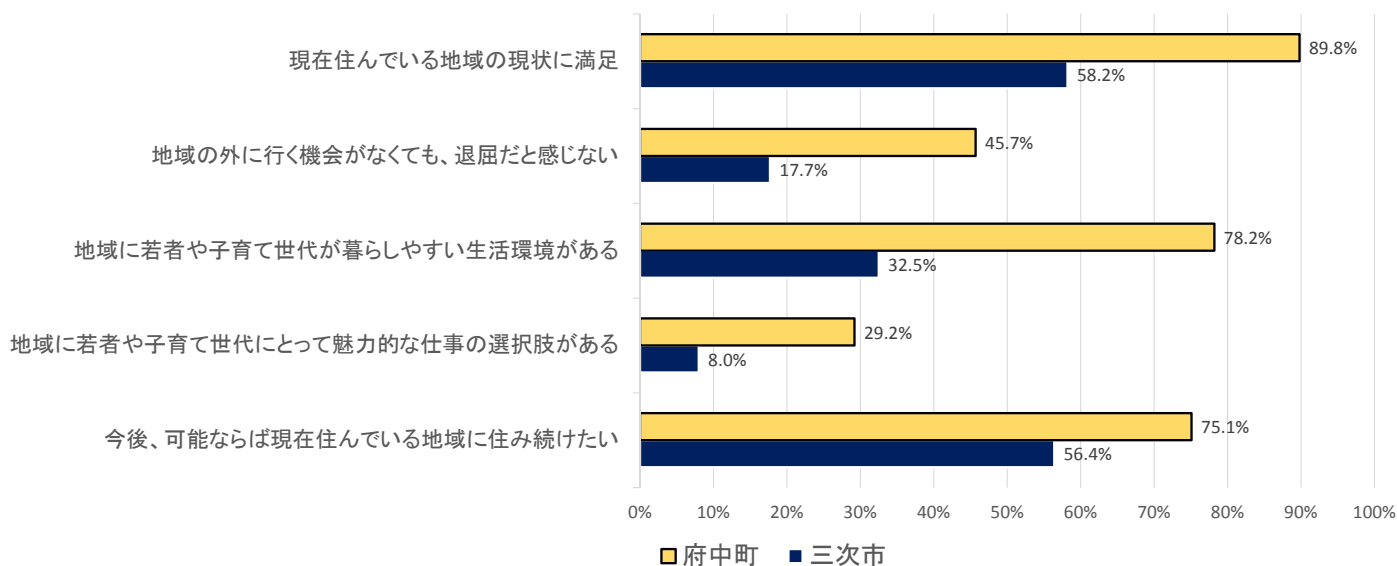
●「現在住んでいる地域の現状に満足」

府中町89.8% 三次市58.2%

⇒多くの地域の現状評価に関する項目で圧倒的な格差。

⇒この格差は、個人の経済状況とは関係せず、ほぼ両地域の消費環境格差によって説明される。

地域の現状評価 ～府中町のほうが三次市より高い



地方都市は「ほどほどパラダイス」 ～周辺地域にまで及ぶ

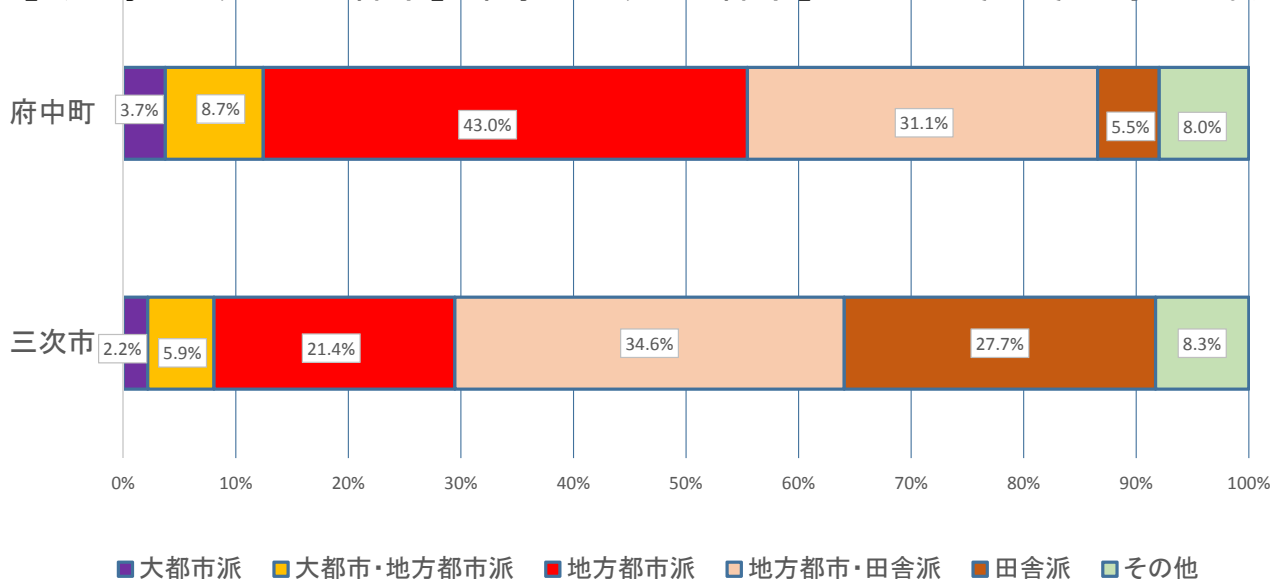
●圧倒的に強い「地方都市志向」。

⇒一生暮らす場所として、「広島のような地方都市」が望ましいと考える人は、府中町で8割台、三次市でも6割台と多数。

⇒「中国山地のような田舎」が一番と考える人は、三次市でも2割台にとどまる。

⇒「東京のような大都市」が一番という人はごくわずか。

府中町は地方都市派、三次市は地方都市・田舎派が多数 (「一生住む場所」として「いいと思う」環境。「中国山地のような田舎」「広島のような地方都市」「東京のような大都市」についてそれぞれ尋ねた。)



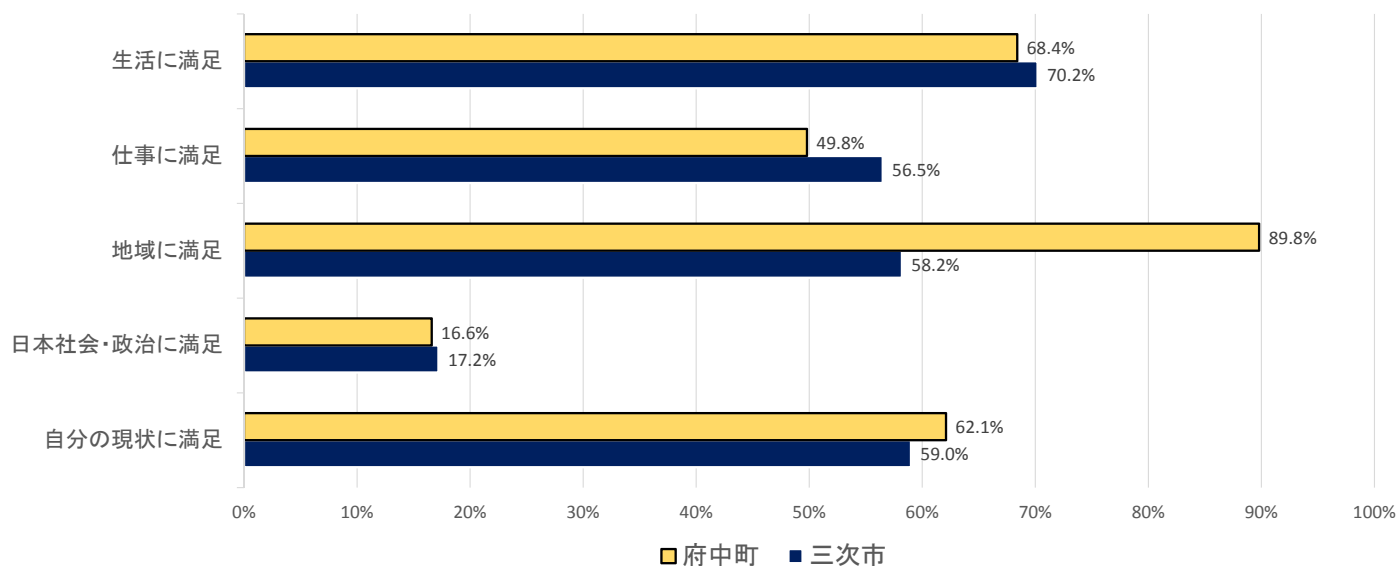
地域満足度以外に、三次市と府中町の間に 各種満足度の格差はあまりない

●各種の満足度で、はっきりとした差がついているのは、地域満足度だけ。

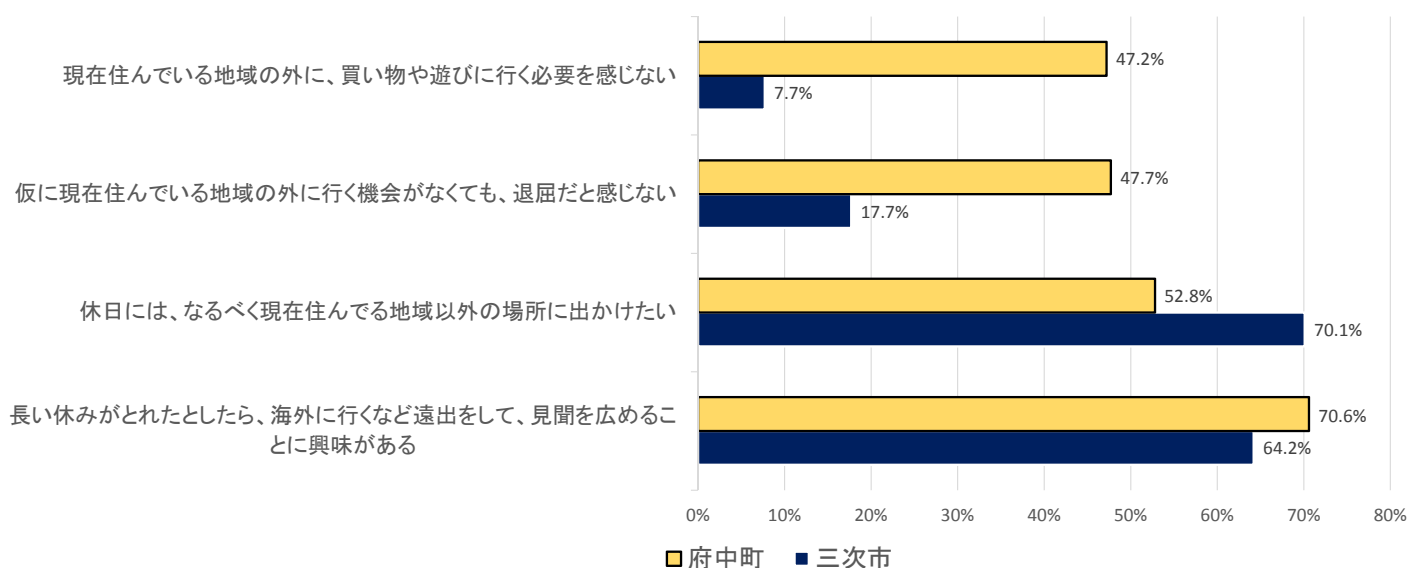
●地域満足度に大きな差があるにもかかわらず、府中町と三次市の生活や自分の現状評価などの満足度にはあまり差がない。

⇒三次市の若者の7割は、休日には住んでいる地域の外に出かけたいと考えている。その休日生活圏は2時間先の広島都市圏に及ぶ。モビリティの高さが、地域満足度の低さを埋め合わせる。

各種の現状評価 ～地域満足度以外は両自治体の差はあまりない



モビリティ感覚の地域差



ソーシャル・ネットワーク格差

●地域活動・社会活動への参加は、三次市のほうが府中町より総じて参加度が高い。⇒各種活動への参加は、地域満足度を高める。

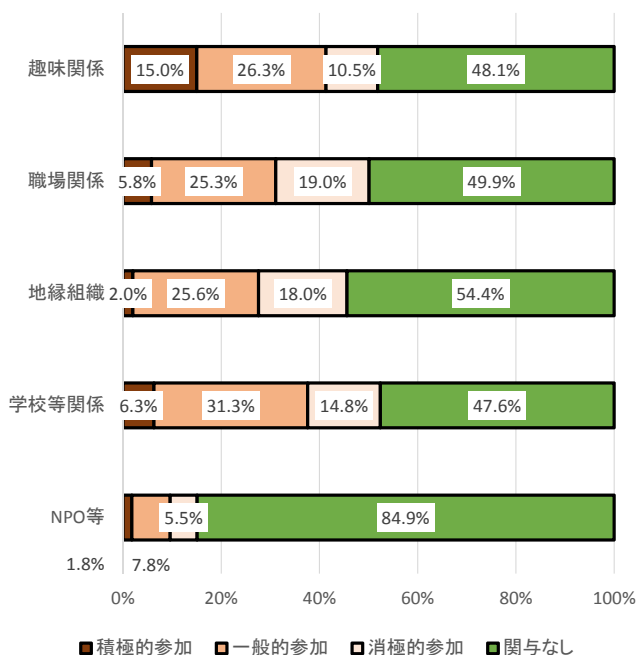
●地縁組織の活動・・・保守政治への信頼。地域の問題に関心があっても、社会問題や政治一般への関心にはつながらない。生活や人生の満足度には影響しない。

●職場参加の地域活動・社会活動・・・仕事満足度を高める。職場の身近な人間関係の一体感を強める一方、社会の多様性への認識は弱める？

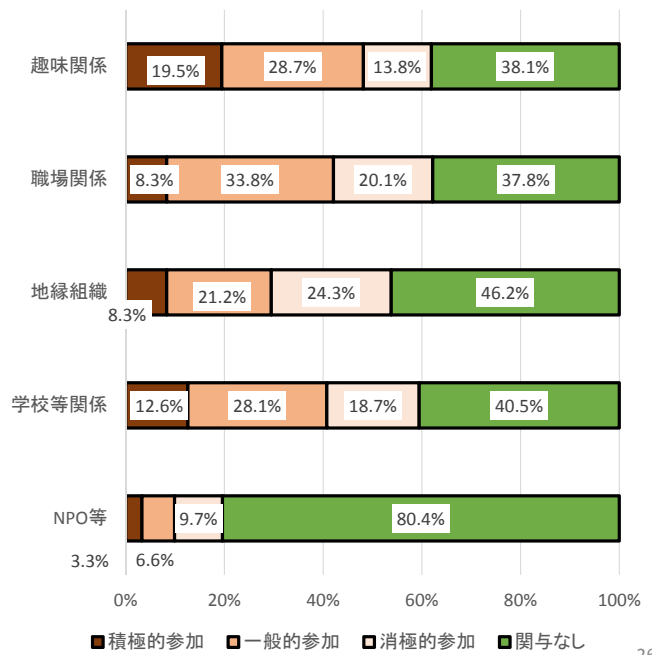
●趣味関係のグループ活動・・・仲間集団だけではなく、異質な人たちとの交流への関心も高める。社会問題・政治への関心も高める。

地域活動・社会活動への参加度(1)

府中町



三次市



ソーシャル・ネットワークと居住歴

●何らかの「地域活動・社会活動」に積極的参加があるのは3割前後のみ。

●居住歴による格差

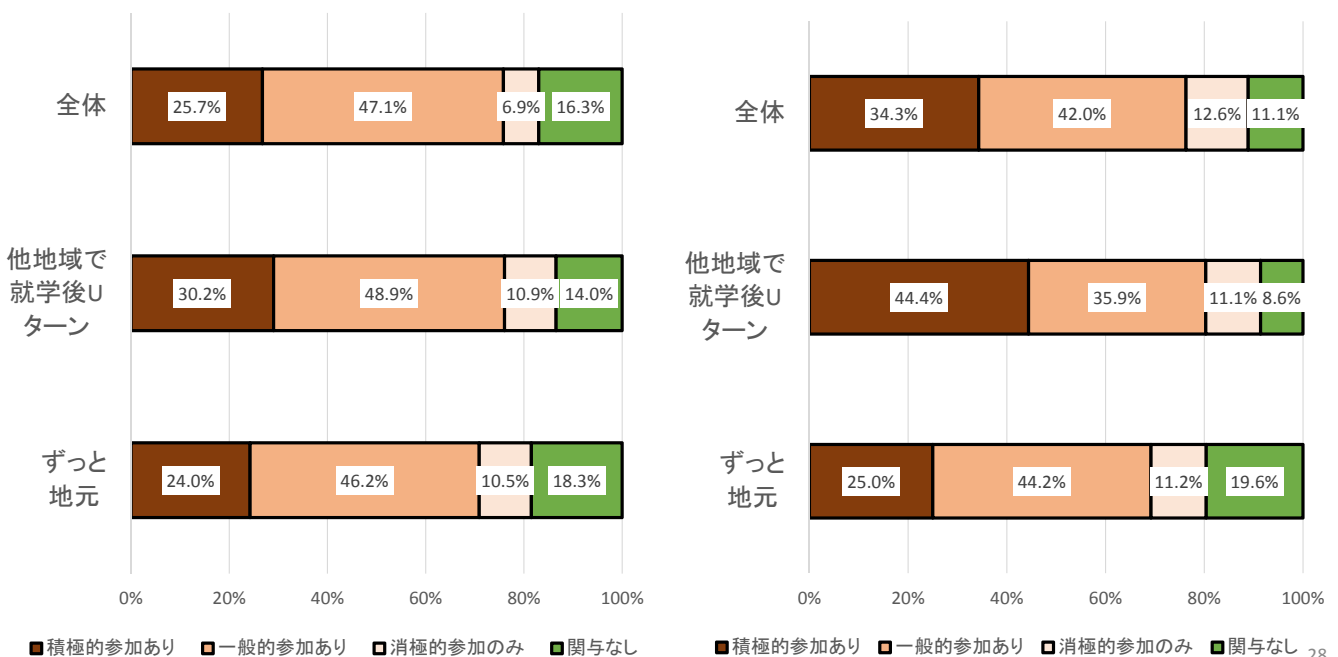
「他地域で就学後Uターン」した層・・・三次市で特に多く、積極的参加傾向が強い。地域活動・社会活動のハブになる傾向。

「ずっと地元」層・・・府中町で特に多く、積極的参加傾向が弱い。地域にこもる傾向が強く、交友関係には満足。だが生活満足度は低い。

地域活動・社会活動への参加度(2)

府中町

三次市



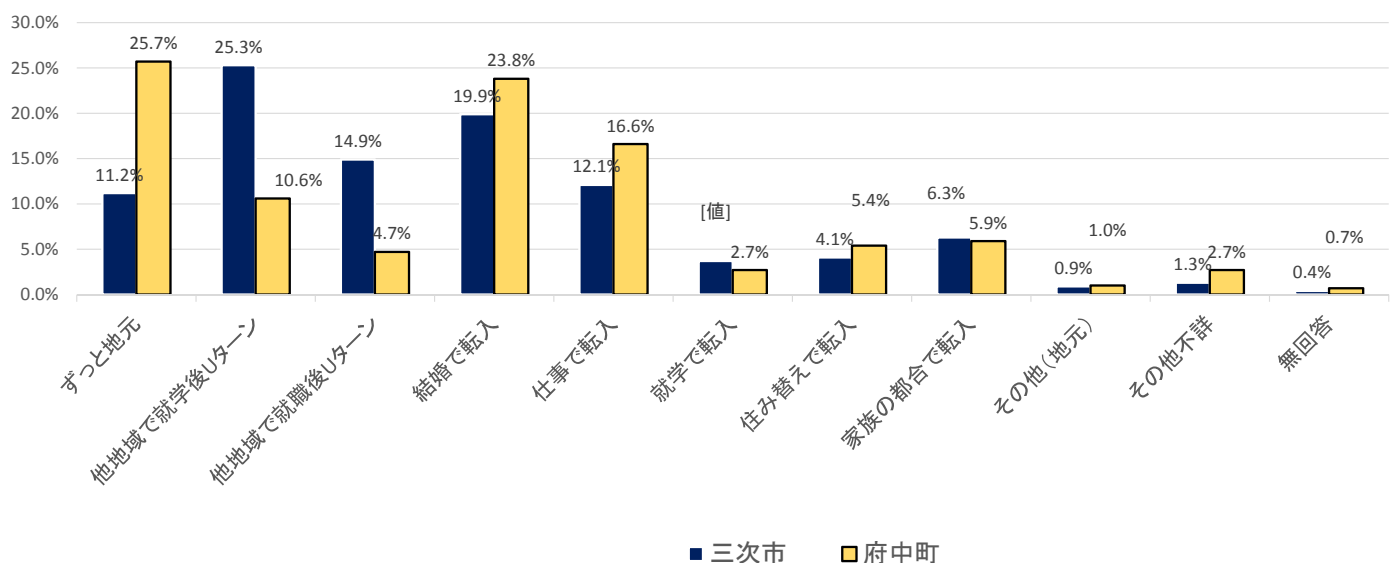
地域社会の流動化～居住歴の多様化

- 1時間以内に親が居住～府中町6割台、三次市約7割
- 「地元に住んでいる」と回答～府中町4割台、三次市約半数
- 「ずっと地元」と回答～府中町2割台、三次市1割台

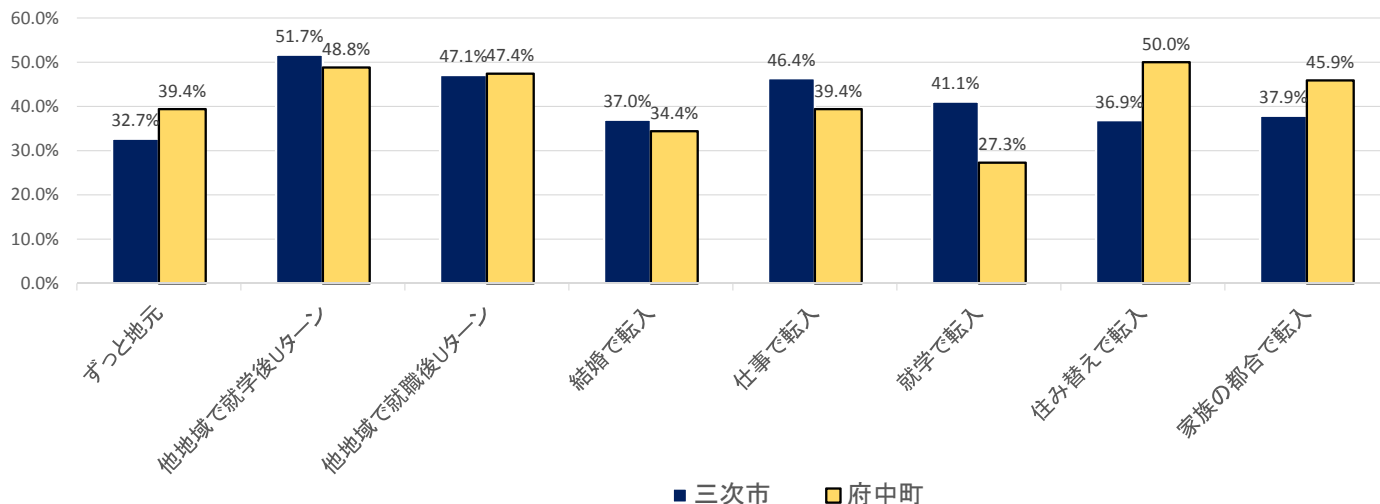
⇒「地元外での生活経験がある」者が圧倒的多数。

⇒若い世代が進む、居住歴の多様化。地元だけの閉鎖的な人間関係にとどまることはかえって難しい。

居住歴（府中町「ずっと地元」「仕事または結婚で転入」が多い／三次市「Uターン」が多い）



「現在住んでいる地域にいる多様な人たちと交流することに関心がある」× 居住歴



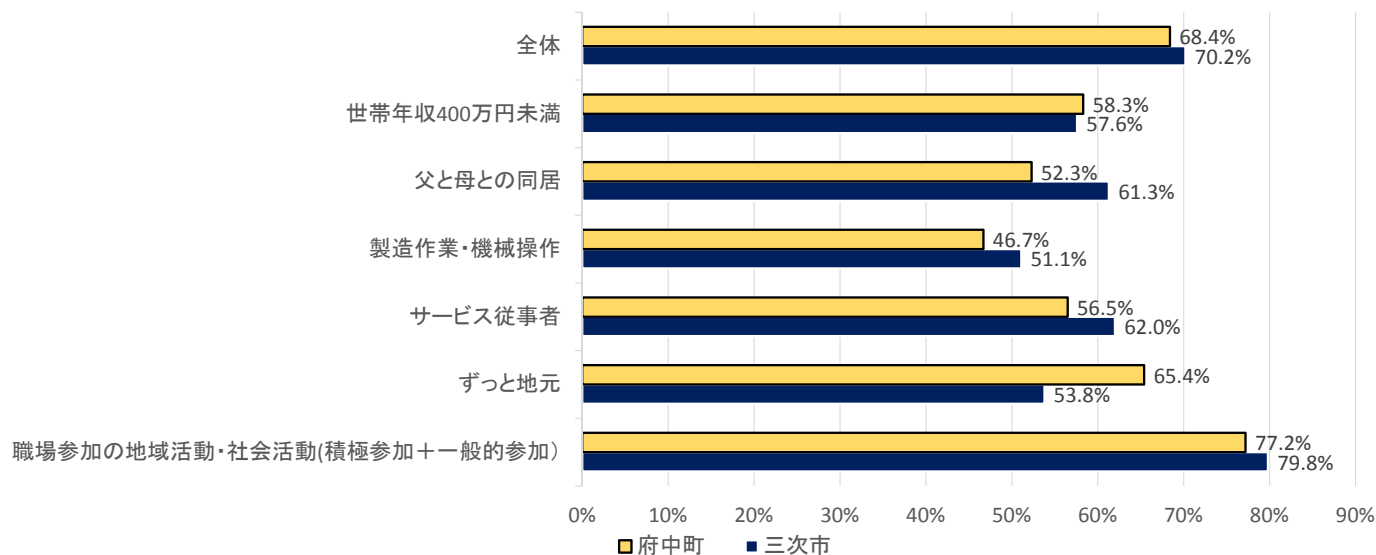
社会経済的格差

● 府中町と三次市の地域間には収入格差があるが、それが各種の現状評価には関連していない。⇒ 地域内の社会経済的格差が重要。例；「生活満足度」「日本はこつこつと努力すれば成功する可能性がある国だ」

● 低収入・低学歴で「階層意識」も低い人のほうが満足度の高い暮らしをしているという逆転的な現象は存在しない。

● 社会経済的に厳しく、階層意識も低い「非正規雇用」(仕事が主、家事が主)と「サービス」職従事者は、「生活満足度」ほか、各種満足度が低く、将来展望も暗い。

「総合的に見て、現在の生活に満足している」×説明力のある各変数



「満足せる者」の顔が見えない

●中間層を取り巻く社会経済状況の不安定化

⇒経済格差と関係なく、20～30代は総じて将来展望に対してネガティブ。

⇒高所得世帯(600万以上)は、府中町20.2%、三次市5.7%と薄い。(相対的に経済的不安が少ないのは公務員くらい。)

⇒社会経済的な堅実志向は世代に共通する傾向(20代のほうが30代より強い)

例:「今後の人生では、人並みに安定した暮らしを手に入れるため、現実的に考えて行動しようと思っている」⇒8割台が支持。階層とは関係しない。

経済格差と区別される自己充足的格差

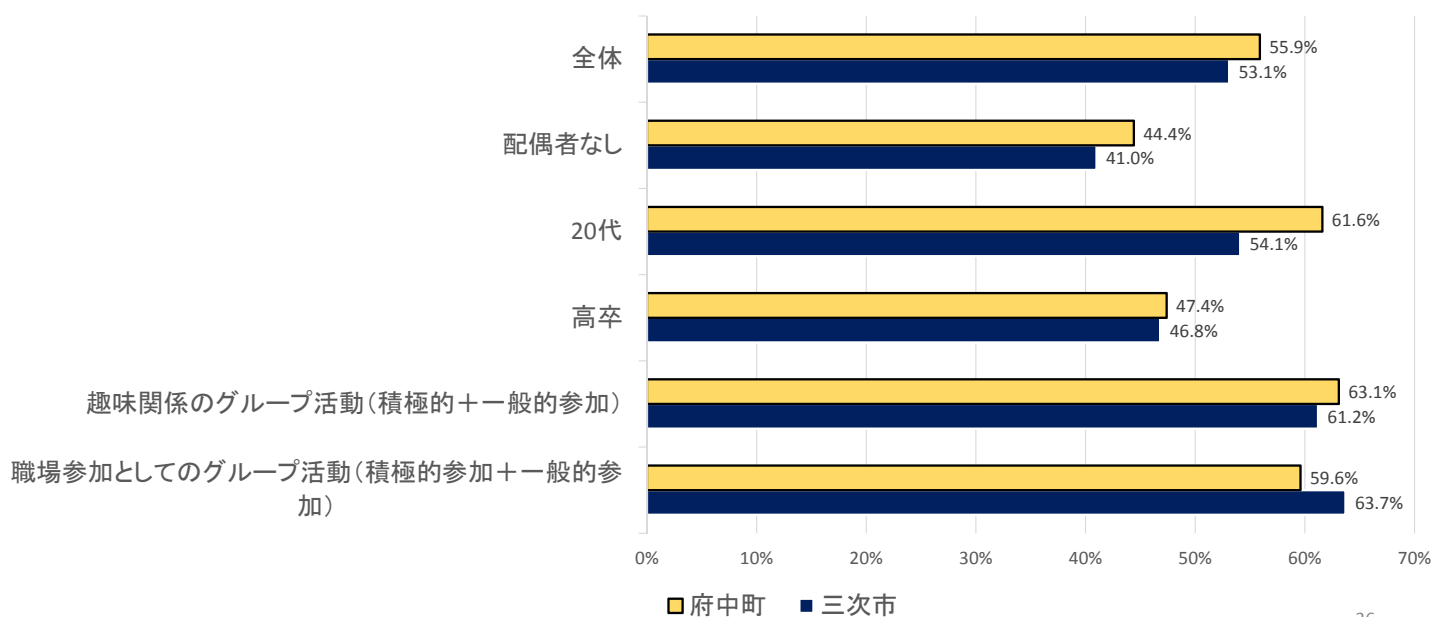
●「一般的な家庭と比べて、自分の生活水準は高いほうだ」(＝高めの階層意識)

⇒各種満足度(生活、仕事、地域、日本社会・政治、自分の現状、友人関係等の現状評価)との強い結びつき。世帯年収や個人年収、あるいは雇用形態が説明力を持たない項目とも強い相関。

⇒コンサマトリー(＝自己充足)傾向・・・ミドルクラスの社会経済的な期待水準が低下している状況で、年収の多寡よりも、人間関係などの生活のクオリティの充足感の有無が「生活水準」を意味する傾向が強まる。

例:「自分の将来に明るい希望を持っている」「自分は幸せだと思う」・・・個人年収・世帯年収・雇用形態には説明力がない。

「自分の将来に明るい希望を持っている」×説明力のある諸変数



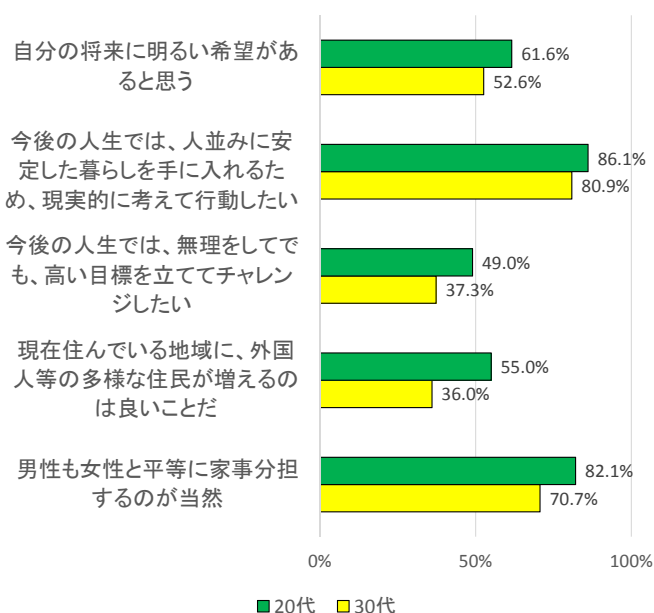
自己充足的(コンサマトリー)格差

●経済的収入のわりには階層意識が高い(低い)プロフィール

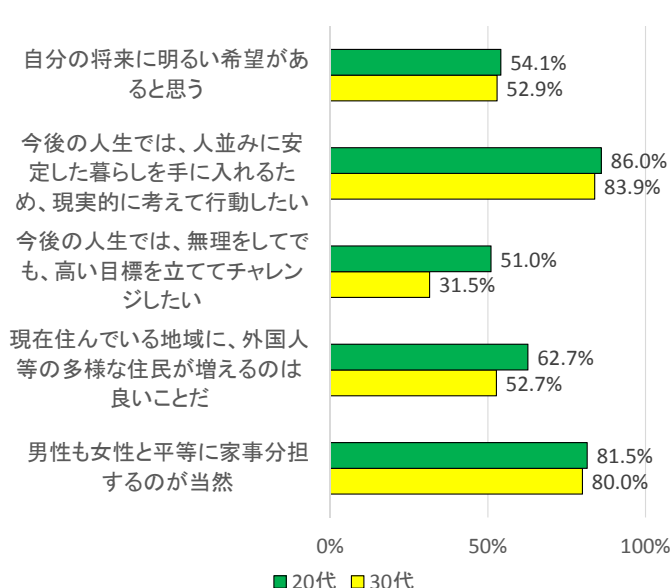
- 1、「20代」・・・経済的には堅実だが、人生に対する楽観的傾向が強い。30代と比べて、決して「保守的」ではない。
- 2、「就労時間短め」・・・専業主婦や学生は世帯年収のわりには階層意識が高い。長時間労働従事者は、階層意識が低く、各種満足度も低い。
- 3、「親からの独立」・・・「父または母と同居」の人の満足度は低い
- 4、「製造作業・機械操作」・・・収入は平均レベルだが、生活や仕事の満足度が突出して低い。

20代と30代、どちらが保守的？

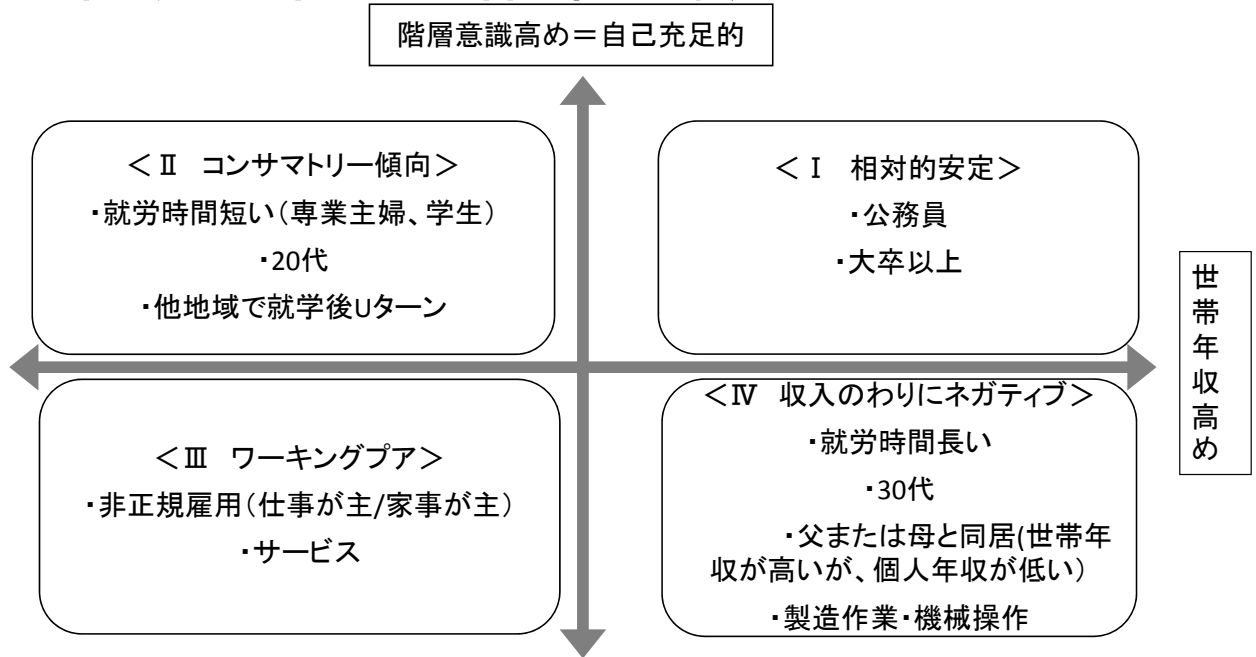
府中町



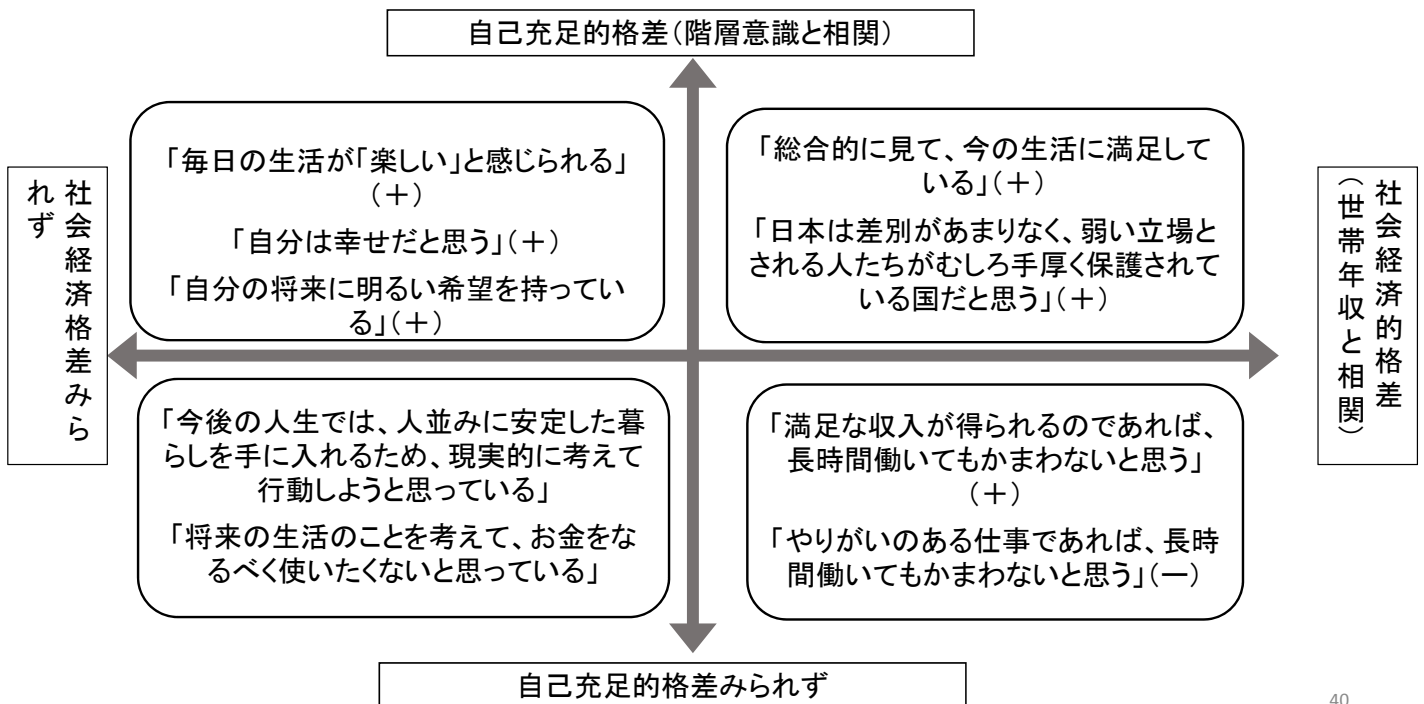
三次市



社会経済的格差と階層意識



社会経済的格差と自己充足的格差



ダウンシフターの限界—さとりきれない若者たち

●自己充足傾向と「ダウンシフター」的価値観の親和性

～階層意識が高めだと「社会情勢を考えれば、今後、生活水準が上がらなくてもかまわない」と考える傾向が強まる。

●多くは「ダウンシフター」になれない

～「自分なりにお金をかけずに楽しく暮らす方法があるので、今後、生活水準が上がらなくてもかまわない」と思う人は全体で2割程度。

●7割は「余暇の生活を優先して、仕事で長時間働きたくない」にもかかわらず、収入が低いと「満足な収入が得られるのであれば、長時間労働もかまわない」人が多数派になる。 ⇒ 地方の若者のジレンマ

問題提起

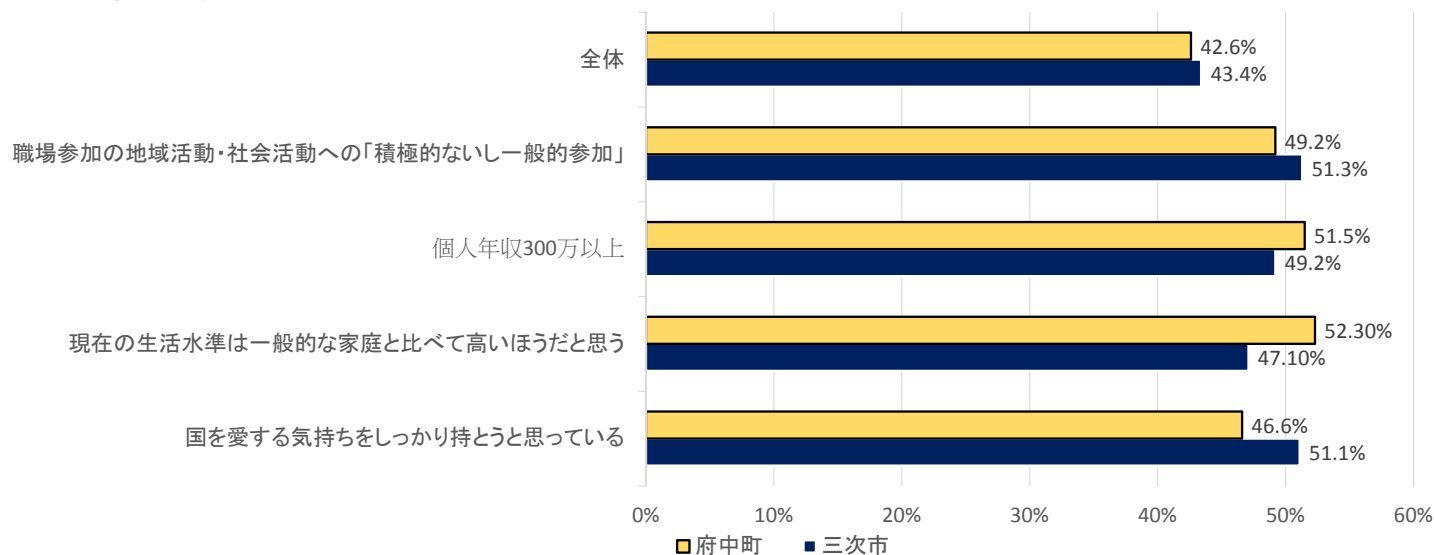
●「地方の若者」を貫く、様々な分断線を超えて、「対話」をつくる必要。

⇒行政の住民満足度調査では、満足度が高ければそれでいいということになる。だが、むしろ、「満足できる人」と「満足できない人」との間のリアリティ・ギャップに注目することが大事。

～例:「日本は差別があまりなく、弱い立場とされている人がむしろ手厚く保護されている国だと思う」という項目に関するリアリティ・ギャップ。

⇒地縁組織の有力者に偏る「タウンミーティング」とは異なり、アクティブな社会調査を活用しつつ、サイレント・マジョリティやマイノリティを公共の議論に呼び込む試みを。

「日本は、差別があまりなく、弱い立場とされる人たちがむしろ手厚く保護されている国だと思う」× 諸変数



43

今後の展開

●三次市、府中町を中心に、インタビュー調査を夏～秋と継続（アンケートを行い、1時間半ほどかけて、その回答理由を尋ねるというスタイル）。

⇒今回の統計調査篇と合わせて、出版を計画。

●地域の関係者、メディア、学術関係者等のあいだでプレゼンする機会を積極的にもうけることによって、「地方の若者」に関する議論と対話を活性化する活動を展開したい。